



杉江雅彦氏著

『株式価格の理論』

(多賀出版 A五版
一八四頁 二、二〇〇円)

凡ての価格は基需給函数の評価時に於ける絶対的位置を材料として決せられるという基礎理論が、生産主体を権利と義務との総合という特殊労働の供給者と解して適用される時、一般原則に如何なる特殊法則の加味を要するか付き、この主体が株式会社ならば、その株式価格として、権利義務の総合譲渡価格として株価論が昔から存する。一般財における効用に当るものは何かにつき、煎じつめれば配当であると斯学の先覚佐之江佐一郎教授は指摘された。そ

For some in ancient books delight,
Others prefer what moderns write:
Now I should be extremely loth
Not to be thought expert in both.

の指導を受けた杉江雅彦教授は、この配当の源泉は其会社の収益にあるとの見解から、先般新著「株式価格の理論」を多賀出版株式会社から公刊された。(昭和五十八年七月刊・定価二二〇〇円)

同書は第一部でその収益の理論を説き、最近の傾向として成長の理論に眼を広げ、収益力の成長に着眼する。第二部に入つて、まず戦前からの米国での株式価格論史を紹介し、進んで戦前からのウィリアムスやグレアム等の配当の中心観に立入る。

右により察せられる様に、株価関係の文献は甚だ多い中で、本書は他と一線を劃する多くを内包する。配当の理論から更に其根源たる収益の理論に進み、また近代の特長として長期動態を収容し、成長現象を觀察する等も、従前の同種文献に殆んど見えなかった。

株価についてはバブソンの昔から文献は多いが、ハウツー物と評されるものが多かった。本書は其と狙いを異にし、歴史書乃至特定部門の学史書という一面と、其を足場にした理論書としての一面とを併有し、近代理論に立脚した所産である。経済一般

理論の近代的発展と、その各論としての部分理論の発展とが、歩調が揃わない例が近時多く見られたが、両者の連絡の道を切開く緒口を例示するという意味で、本書の方法等の解釈拡張などが試みられたならば幸であらう。経済一般理論に対する各論に、農工商等の業種分類による各論が古くよりあり、其内商学では更に商品配給論・金融論・交通論・保険論等の各論が分立し、金融論は更に長短時間金融論と内外為替論の二各論を分立し、このうち長期金融論の又各論として株式論、債券論等が分立する。株式価格論の発展は此等諸各論の発展に好例を示す。更に此等の各論発展は、各に対応する経営学各論の発展を伴うであらう。株式価格論の新著の出現が、社会科学フロンティアの理解発展に資する一面がここにも存在する。

長尾義三 (大学商学部名誉教授)

G・ポーター／H・リブセイ著
山中豊國／中野安／光沢滋朗訳

『経営革新と流通支配——生成期
マーケティング研究——』

(ミネルヴァ書房 A5版
三三三頁 二、九〇〇円)

このたび、G. Porter & Livesay: Merchants and Manufactures—Studies in the Changing Structure of 19th Century Marketing, 1971 ed.—(商人と製造業者——一九世紀マーケティングの変化構造の研究) が山中、中野、光沢三氏により全訳書としてミネルヴァ書房より公刊された。原著者の労作、また訳者の精進、ともにマーケティング研究学徒にたいしてマーケティング研究の視座の再検討を訴える好個の文献として、その評価は高いものがある。

訳書は三三三頁にわたるが、一八一五年(商業制度の完成期)以降のアメリカ製造業と、その経営におけるマーケティングの史的展開である。製造業種目は初期の織物業、鉄鋼業、鉄道開運産業、石油業、製氷、精肉、産業機械、シガレット産業、食

料品、ドラッグ、金物業にわたり、その生産財と消費財のマーケティングの史的展開、とくに南北戦争(一八六一—六五年)前後の製造業者(織物、鉄鋼、ドラッグなど)と中間商人、ジョバー、ブローカー、金融業商人などの機能の消長、その当時の資本市場の条件的関係が論述されている。原著者・二名とも元来、歴史学者であったため、その専門を生かして広範な史的資料を駆使して精緻な展開をなし、また、訳者の健筆も精彩をそえて、その時代の製造・流通・金融市場の有機的関連性を浮きぼりにしている。

そして、その当初より、製造業の増大する生産能力は過剰製品の処理という流通・販売問題を宿命としてアメリカ経営史に織り込まれていることを指摘しており、マーケティングの存在理由は古くて新しく、新しく古く課題であるということこそ原著者の経営史観であることを強調している。

しかも、そのマーケティング・流通システムの变化を市場支配の形態変化、つまり、商人支配型から現代のメーカー支配型へと移行する要因を市場条件の変化に求め

ている。換言すれば、生産の大量化の進行と流通・消費市場の大量適応条件の変化の史的分析に求めている。

訳者あとがきにも述べられているごとく、歴史の視点からするマーケティングの研究は数が少ない。その数の少ない研究分野に一石を投じた意義は大きいと言える。その意味では、本書の内容はアメリカの社会史、経営史の基礎的知識とマーケティングの意味の歴史を読者に十分に与えてくれる。訳者諸氏の労苦は経験者のみが熟知しうるわけであるが、その労に敬意を表すると共に、あえて、斯学の研究のわれわれには必読の書であることを特筆して、書評としたい。

西川良一(大学経済学部教授)

ヘンリー・ジェイムズ著

有馬輝臣訳

『ポイントン邸の蒐集品』

(山口書店 A五版
二七七頁 二、五〇〇円)

二十世紀英米小説の巨匠ヘンリー・ジェイムズの研究に年来取り組んでこられた訳

者による、表題の作品の本邦初訳である。

ロンドンよりさして遠くない南英の地にポイントン・パークと呼ばれる邸宅があり、そこには歳月をかけて鑑識眼と努力により、イタリア風、フランス風の調度品をはじめヨーロッパ文化の精華の如き品物が調和を保って趣味よく集められている。しかし、所有者のゲレス未亡人は、英国の長子相続制のもとでは彼女の人生の結晶ともいふべき邸宅と蒐集品を息子オーウェンの結婚に際して譲り渡さねばならない。だが、夫人には息子の婚約者モーナは、およそ美意識に欠けている俗物にみえ、美しい財宝にはとんでもない扱いを受ける暗い未来しかないように思われる。おりしも、この小説の主人公であるフリーダ・ヴェッチがふとしたことによりゲレス未亡人と親しくなり、財宝を巡るドラマに巻き込まれてく。画家を目ざしてフランスで印象派風のゆ訓練を積んだこともあるフリーダは、一目で邸宅と蒐集品の価値を認めることにより、ゲレス夫人に気に入られるのだが、夫人はやがてフリーダを息子の嫁に考えて策略までめぐらすようになる。

このように、骨格は財産相続と恋のゆくえを扱った通俗性もある小説なのだが、ジェイムズの作品の例にもれず、登場人物の利害関係、愛憎の複雑さと、きわめて感受性が強く聡明で潔癖な倫理観を持つフリーダの意識をとうして作品の大半が書かれているために、ごくのある心理小説となっている。

有馬氏の訳は、心理の綾を描くので難解さには定評のあるジェイムズの文章を、全体として平明な日本語によく移している。会話文は現代の日本語風になれており、電報文の訳出もうまい。ただ、長い地の文の微妙な比較表現や、副詞句の訳には多少分りにくい個所がまれにある。この点は、読点の使用に今ひと工夫あればと思うことと関連する。しかし、これは全体に対する小さな瑕瑾である。

巻末の解説は、ジェイムズの作家活動、作風が手際よくまとめられ、これ自体、訳者の心理小説観がうかがわれる労作である。

ジェイムズ作品の邦訳は、他の企画も進行中だが、とかく難解さのみ有名な彼の小説が、

説が今少し日本の読者に親しまれることが望ましく、有馬氏の訳業の完成は、その方向を進める点で喜ばしい。なお、この本は、アメリカ文学とのみみられがちなジェイムズの作品にあつて、イギリス小説愛好者にとつても特に興味深い作品であることに附記しておく。

押本年眞（大学商学部助教授）

岡利郎・西田毅・平村一・山田博光・和田守編 民友社思想文学叢書 第二巻

『山路愛山集』(一)

(三一書房 菊判 九、八〇〇円)
(四四五頁)

明治も二〇年代に入ると、維新後の社会を批判的に捉え直そうとする思想運動が活発になってくる。その先鋒が、『国民之友』や『国民新聞』を擁し、多彩な論陣を張った民友社であった。徳富蘇峰と因縁浅からぬ本学同志社にあって、人文科学研究所ではつとに共同研究が行われ、『民友社の研究』(昭和五二年)が刊行された。また、杉井六郎同研究所教授の『徳富蘇峰の研究』(二九七七年、同氏ら編『同志社大江義塾

徳富蘇峰資料集(一九七八年)などの業績がみられる。そしてこの度、西田毅法学部教授らによって「民友社思想文学叢書」が編まれ、第二巻『山路愛山集』(一)が上梓された。同叢書は愛山集(二)の他、徳富蘇峰、竹越三叉、国木田独歩や徳富蘆花らの文学者、さらに民友社関係資料集など、全七巻の刊行が予定されているという。

第一回配本の『山路愛山集』(一)、編者は北海道大学の岡田郎氏。愛山研究の第一人者である。続刊(二)に収められるであろう「解説」に論及されるかもしれないが、本書の感想を少し記してみたい。

一般に、思想史研究の基礎作業として、資料の整理と伝記研究の二点が指摘されよう。本書は従来の内山省三編『愛山文集』(大正六年)、大久保利謙編『山路愛山集』(明治文学全集35、昭和四〇年)に比べ、愛山の前半生に一卷四百余ページが充てられていてという量の面からだけでなく、『博聞雑誌』『雪月花』『婦人新報』など、更には、従来軽視されてきた青年キリスト者の息吹を伝える『女学雑誌』『野声反響』(一号で廃刊)、『基督教青年』等の所掲論説

を収録し、質的にもかなり充実した資料集となった。本書によって愛山研究は新しい次元を迎えることになろう。

ところが、本書では、これらの論説を雑誌別の排列としている。斯種の資料集としては著述(発表)編年順の方が利用に際して便利であることはいうまでもなからう。また、編者が進めておられる愛山研究に対する要望とも関わるのであるが、明治二十四年の創刊から六年間、愛山が書き続けた『護教』の論説は他を圧する程のものであった筈である。同誌の現存が伝えられぬが故に尚更、愛山が神学的論争を挑んだ横井時雄や渡瀬常吉の反論をも参考として収録してほしかったし、『青山評論』『天明新誌』等のメソヂスト系雑誌にも配慮すべきであろう。それらを通して、明治二〇年代の愛山像に、より近づくことができるのである。向後、こうした観点も斟酌されて、本格的な愛山の伝記を著わされることを、編者に強く望みたい。(それにしても、何と心憎い定価であろうか!!)

山本幸規(同志社大学大学院文学研究科博士課程(後期))

武間富貴著

『スモークツリー』

(同志会同窓会一同 A五版
二一二頁 非売品)

「スモークツリー」の著者武間富貴様は、同志社創立以来の功労者大沢善助翁を祖父に徳太郎氏を父に持たれ、同志社スピリットさながらの恵まれた家庭に育ち同志社で学ばれました。卒業後は同窓会員として六十有余年その間学校法人同志社の評議員、理事、同窓会長等の要職に着かれる等、母校のため、同窓会のために尽してこられました。現在も同窓会名誉会長として会を見守っていただいております。

また新島家との深い交りの一つに、幼時新島夫人から親しく茶道を学んでいられたときいております。

年毎に同志社の昔を語られる方が少なくなってきたおります時、古いお話を伺っておかなければ現在の同志社が創立以来どんな歩みをたどってきたかを知る貴重な資料や歴史のかくれた面は、いづれは過去の中に消されてしまいかもしれません。

幸い著者は過去の多くの資料と記憶を照し合せ乍ら誠実に且つ丹念な努力の下に「スモークツリー」を完成されました。

同書は明治・大正・昭和の三部と、詳細な年譜に分けられて、それぞれが小項目毎に題を設けて書かれている為、大変読みやすくなっています。同窓生のための書物であるばかりでなく、三世代に亘って世相の変遷をのり越えて、キリスト教精神の下に理想の教育の場を支えてきた同志社の側面史とも云えると思います。

この書を読んで私が強く印象づけられたのは著者の母校愛の強さでございます。その気持の現れとして、新島精神やキリスト教精神が置きざりにされようとしている現在の同志社に対して反省を求める文意が所々に見られます。

これは父祖三代に培われた著者ならではのお言葉と思われ、このご本の完成に対する並々ならぬご努力と根気心からの尊敬と感謝の気持で一杯でございます。

尚書名の「スモークツリー」は著者も書かれております様に、私達同志社ガールズにとっては若き日の思い出のなつかしい樹

であります。当時京都に一本しかないこの事で、デントン先生がとても大切にまた非常に愛されていて、これを植えて育てるのはむづかしいと何かに記されていましたが、栄光館前庭のスモークツリーは今尚勢いよく繁って花を咲かせ私共を安堵させています。

この書「スモークツリー」は、同窓会や女子部の記録ばかりでなく同志社創立以来多くの先輩の方々の努力と母校愛に支えられてきた今日の同志社の記録であります。

私共の知らなかった歴史を知る貴重な資料で、後々まで読む人に同志社の精神を知っていただけな事と存じます。少しでも同志社に関係のある多くの方々に読まれる事に切に希望し、同書を推薦申しあげます。

川名美津子（同志社同窓会会長）

（ご希望の方は、同志社同窓会へお申込下さい）

福本武久著

『新島襄とその妻』

（新潮社） B六版
二五七頁 一、一〇〇円

昭和四十年、同志社大学法学部を卒業さ

れた福本武久氏の小説『新島襄とその妻』が昨年十月、新潮社から出版された。氏とは昨年一月、新島八重さんの没後五十年を記念して、工学部の末光力作教授と共に鼎談（同志社時報第七四号）したのが機縁で、今回の書評の依頼になったのだと思う。

我々同志社人は、多くの歴史家の眼を通して描かれた新島像をもっている。しかし、歴史家の眼は小説家の眼とは異なる。歴史家はできるだけ主観や私情を排して、冷静に、客観的に、史実にもつき対象たる人物をその思想性に重点をおいて表現しようとする。従って、そこに描かれる人間は、概して冷たい、静の人間である。それに対して、小説家は理性と感情、強さと弱さ、喜怒哀楽をもった人間とその生き様を鋭い想像力と文筆力を駆使して描き上げる。

福本氏の小説『新島襄とその妻』はほぼ史実にそって、妻八重さんが新島先生に出会った直前の明治七年から、先生の亡くなった明治二三年の間をカバーする。氏は小説家の鋭い創造力と直感力で、歴史的事実としての無数の点を線につなぎ、それに生命

の息を吹きかけて、見事に人間新島襄の苦悩と情熱と行動とそれを理解し支える妻八重を活写した。

八重さんは強烈な個性ゆえに、明治・大正・昭和という縦の倫理の支配する時代にあつて、当時の学生や世間からその行動を批判され、戦後の民主主義、人間平等の時代になつても、彼女に貼られたレッテルが取り除かれないままに現在に至つてゐる。

氏はそのような八重さんを現代の視点から捉え直すことによって、彼女の復権、名誉回復をはかるうとして、成功した。氏は、忍従を美德とする当時の日本女性を理想とせず、アメリカの独立自尊の女性を高く評価する新島先生にふさわしい妻として、八重さんを描いている。我々は今まで新島先生を妻八重さんと切り離して見てきたが、この小説によつて、今後、新島夫妻として見る事が可能になったといえよう。願わくば、氏にもっと多くの史料を用い、もっと多くの夫妻にまつわるエピソードを書いてほしかったが、紙幅の関係で困難であつたのだらう。

同志社卒業生十六万人の中には、留岡幸

助を始め、小説の主人公になりうる個性的で同志社人的な人物が沢山いる。氏には同志社人の良心でもつて、彼らをもう一度書上によみがえらせてほしいものである。

氏は会津時代の八重さんを『会津おんな戦記』（筑摩書房）にまとめ上げられたが、読者諸氏には合せて読まれることをおすすめしたい。

井上勝也（大学文学部教授）

越智文雄著

『同志社栄光館より学びしもの』

— 女子大学生へのメッセージ集 —

（シオン出版 B6版
一三四頁 九八〇円）

かつて私は、同志社女子大学学報「しばぐさ」のために、デントン先生の親友ボズビシエル女史の遺品の中にあつた、元同志社女専校長、松田道先生の英文の手紙を翻訳したことがあつた。それは、先生が同志社女学校に入学された明治十八年から、定年を迎えられる前年、すなわち栄光館の建つた昭和七年までの自伝的回想ともいうべきもので、一人の信仰深い、秀れた人格を

通して語られた当時の様子から、生々とした同志社女子部前半世紀の歴史を垣間見ることができたのであつたが、此の度、元同志社女子大学長、現在、同学名誉教授の恩師、越智文雄先生が、随筆集「同志社栄光館より学びしもの」を刊行されたことから、豊かな学識と霊的な目をおもちの先生の躍如とした精神を通して、栄光館竣工前後から現在に至るまでの後半世紀の同志社女子部の歴史と、同志社教育の本質にふれることができることを非常に嬉しく思う。

越智先生は、十七世紀英国詩人、ミルトン研究の第一人者であるとともに、昭和三年、同志社大学予科御入学、九年、大学御卒業直後から御定年の五十五年まで、同志社女子教育に専念された、「生えぬき」の秀れた教育者でもある。この間、三十六年から五十年まで、女子大学の学長をつとめられたが、当時の先生の思い出の中で、次の三つは特に印象に残っている。第一に、今尚、毎朝行なわれている女子大学の礼拝に、十四年間、殆ど毎日出席され、栄光館の聖壇に座っておられたこと。第二に、女性の意見に真剣に耳を傾けて下さつたこ

と。(これらは先生の人生観に基づくもので本書に詳しい。)第三に、格調高い式辞や奨励で、栄光館に集う若い魂の覚醒と高揚をはかられたことである。

本書は、その式辞を主な部分の骨子として、もう少し気軽な、しみじみとした人生観の漂うものも含めた二十五篇からなる随筆集で、その構成は次のようになっていゝる。序章 命名の黙示録―わが過去半世紀の同志社生活に思う一つのこと。第二章 私学同志社と女子教育の理念 「女子大学の目指すもの」 「天地創造のイメージ」 他五節。第三章 学園随想 「なんじ、尚一つ欠く」 「驢馬と天馬」 他五節。第四章 人生随感 「生命への凝視」 「あさりの味、しじみの味」 他五節。終章 定年を迎えて思うことも。附録 (一)戦争と教壇―同志社高等女学校時代 (二)輸送船せりあ丸の行方。序章、終章は定年時に、附録は、一九六五年と一九五三年に、それ以外は学長時代に書かれたものである。

英語、英文学はいうまでもなく、ギリシヤ語、ラテン語、西洋古典文学、新旧約聖書などの豊富な知識と、戦争の御体験や聖

壇での日々の黙想から生れたお言葉は、厳しさと情熱を底に秘めた、温厚かつ端正な先生のお人柄をよく表わし、非常に感銘深いものである。

中島和子 (女子大学教授)

小倉壽二著

『市民福祉の政策と思想』

(世界思想社 B6版
二二二頁 一、五〇〇円)

戦後、社会福祉は国と自治体が責務をもつ課題となった。国民の「健康で文化的な最低限度の生活」を保障する民主社会が実現して、曲りなりにも各種の社会福祉立法が制定され、昭和二十年以降、今日に至るまで公的な社会福祉施策が展開してきた。戦前は社会事業、厚生事業と称し、さらに、それ以前には慈善事業、救済事業と称して民間の篤志家やキリスト者を中心となつて貧困層の生活問題に対処してきた。国は、国民の貧困問題に関与すると市民養成になるといって、生活困窮の問題は家族相互の助け合い、地縁の相互扶助にまかせて、それを醇風美俗と称し、国はもっぱら国防と殖産興業に金をつぎ込んできた。こ

の国の考え方は過去も現在も為政者の頭のなかではそれほど変わっていないように見えるが、国民、市民のレベル、また地方自治体で民主行政を志向するレベルでは大きな質的变化をとげてきた。社会福祉の公的性格と公的責務の課題は市民の最低生活保障と生き甲斐や幸せに生きる権利の課題として日常生活のなかに根づいてきたのである。日本人は飢えて死ぬこともなく、乞食をしたり、路頭に迷つたり、本当は親子心中をすることもない社会になった。万一、そのようなことがあれば福祉行政の怠慢であり、失敗である。

しかし、現実には、この福祉の怠慢や失敗が多く、ここ数年来、福祉切りすての行政が公然と行われるようになった。著者は長年のあいだ京都市をはじめ各自治体行政の審議会、協議会の委員として活躍し、福祉行政に多くの提言と協力に尽力してきた。公的福祉の内部にあつて、その発展、動向に市民の立場から参画する立場にあつた。著者は社会事業史の専門家でもあり、戦前、戦後の移りゆく激動の社会福祉分野の事象について鋭い観察と分析を行つてき

た。本書は、この客観的に大所高所からみた著者の「福祉の原点」を探究し、見定めようとした論考を集大成したものである。

ここ四、五年の間に本書の内容は醸成され、検討された論考によって構成されている。市民の側の福祉とは何か、その思想的根拠、福祉教育の必要、市民参加、市民福祉の原像、専門性、社会福祉協議会の役割、コミュニティ・ケア、女性の活動、福祉施策の策定について、など、それぞれ著者が激動する福祉行政のなかで、自分の体験、経験、学殖、蘊蓄を傾けて書き綴ったものばかりであり、福祉の新しい視野と展望を指標し、示唆する学生諸君を始め、この分野の専門家、行政関係者、関心のある市民の方々の必読の書といえよう。

住谷 馨（大学文学部教授）

レオ・デュエル著／石黒昭博訳

『空からみた考古学』

（学生社 A5版
三一九頁 四、二〇〇円）

学問が専門化すればするほど、重箱のすみをほじくるような研究や特殊専門化した業績がもてはやされる傾向がでてきがちで

ある。この書は、そういった学者のスペシャルリズム・マンネリズムに対する警告ともいえよう。「航空写真による判読」といった技法について、やや宣伝の匂いが多すぎるけれども、すばらしい内容も多い。作物の成育度や湿り具合から未知の遺跡を発見したり、地上では形の判読ができない大規模遺跡を大局的にとらえることなど、更に発掘地点が遺跡全体に占める位置の確定といったことは、まさに「空からみた考古学」の独壇上といったおもむきがある。

航空写真判読は、私の専門分野である地質学にとっても大切な技法であり、断層の位置の確定や、段丘の分布などの調査にとつては、航空写真をみるのが不可欠とい

ってよい。もちろん、他の物理・化学的技法や、生物の調査なども必要である。考古学にとつても、従来の発掘を主体とした技法に加えて、航空写真判読のような新技法をとり入れることは当然に必要であり、かつそれによって、思いがけぬ進歩がもたらされることが多い。そういった意味で、この書の内容は、考古学を学ぶ学徒にとつては、一読の価値をもっている。また、地

理・地質・第四紀・陸水・海洋学といった、地上・地表の物を対称とする諸科学分野にとつても有用であろう。

こういった自然科学の多分野にわたる書物の邦訳は、専門用語使用の特殊性が伴い、特に困難であろうが、一応の水準に達していることが指摘できるであろう。ただ、筆者が地質学分野の研究者であるためか、地球科学に関する用語に不適當なものが多い。たとえば、地質化学的、地質物理学、地学、浚泥、沖積世の土壌などといったものであり、原文はどうかいてあるのだろうかと考えてしまう。「の目的」というのも、人工的な感じがしてならない。——mark という原語と思うが、自然物の場合、mark は「跡」「痕跡」といった言葉のほうが適當と思ふ。

横山卓雄（大学工学部教授）